

第7回新鋭評論賞

準賞

「けり」についての考察

伊藤 幹哲

馬酔木所属

第一 切字「けり」について考察する意義

一 「けり」は不思議な切字である。周知のとおり、俳句の初学書・入門書の切字の項を開くと、「や」「かな」「けり」をもつて切字を代表させている。しかし後述のとおり、「や」「かな」「けり」について各時代における使用率を統計的に検証すると、連歌の頃から天明の頃まで「や」「かな」に比べて「けり」の使用率は顕著に低い。

二 またよく知られるように、歴史的に切字は発句を脇句から切断するために用いられてきた。だが、現代の俳句実作者が切字を用いる際にそのことを意識しているだろうか。おそらく現代の俳人が切字に興味を持つとすれば、今まで用いられてきたことが少ない切字を用いることで、従来の俳句が有していなかった新鮮な印象を探ろうとする興味による。

そのように新たな切字を探る前提として、かつてそれほど重要な切字として使用されてこなかった切字が次第に重要な切字として認識されていく、また実作が増えていく過程を検証する必要がある。この点について、「けり」はかつて使用頻度が低かったが、少なくとも現代において代表的な切字の一つと認識されており、検証に向いていよう。

第二 統計

議論の前提として、まず「や」「かな」「けり」・これ以外の切字として「たり」につき使用頻度の統計を確認する（別表参照）。

一 純正連歌・俳諧連歌における統計（別表2参照）

(一) さて、連歌からの発句の歴史を振り返ってみても、既に二条良基（以下故人は姓を、存命の人物は名をそれぞれ略する。）が『連理秘抄』において「かな・けり、常の事なり」と述べ、「けり」は「かな」について切字の代名詞的立ち位置を占める。十八切字以降も、一貫して「切字」を挙げる際には「けり」が言及されてきた。

しかし実態として、連歌から天明までの実際の発句における「けり」の使用は「や」「かな」の使用に比して明らかに少ない。

(二) 統計のとおり、川本は蕪村と一茶の句を調査し、江戸末期の一茶において「けり」の使用が割に近付き、ようやく「かな」と「や」を除く切字の筆頭となったとする。

なるほど、中興俳壇を代表する俳人が蕪村であり、江戸末期を代表する俳人が一

茶であるという点に異論はない。だが、彼らと同時代の俳壇全体の傾向を確認しないと、本当に江戸末期に「けり」の使用が増加したのか、また「江戸末期」という抽象的な時期のいつ頃「けり」の使用が増加したか疑問が残る。

そこで天明から樗良、蓼太、几董、白雄、暁台、闌更、化政から成美、巢兆、道彦、士朗、乙二、天保から鳳朗、蒼虬、梅室の句をそれぞれ調査した。すると、天明期五・五％、化政期九・五％、天保期八・五％と、確かに一茶も活躍した化政期に「けり」の使用が増加したとまとめることができる（別表1）。

☉ ではなぜ天明から化政の間に「けり」の使用が増加したか。

ア（ア） この点について川本は芭蕉の「かれ朶に鳥のとまりけり秋の暮」、のちの蕪村の「月天心貧しき町を通りけり」などの秀作が「けり」を有力な切字だという通念を生んだのかもしれないとの仮説を打ち出している。方向性に異論はないが補足を要する。

確かに芭蕉の句は蕉風開眼の句とされる。だが、この句は字余りに談林の影響を見て取れる。また『曠野』における修正前、「とまりけり」は「とまりたるや」であった。芭蕉の「けり」を用いた秀作を挙げるなら「道の辺の木槿は馬にくはれけり」であろう。

また統計をみると、芭蕉における切字「けり」の使用率は低い（別表2）。しかし芭蕉死後、蕉風の復興は俳諧における常なる命題であった。したがって、芭蕉の秀作における「けり」が後世の「けり」の使用に一定程度影響を及ぼしたとみることが可能である。

（イ）また子規の再評価まで蕪村はそれほど著名でなかったとするのが定説である。よって、蕪村は「ホトトギス」以降の俳人の「けり」の使用に影響を与えたかもしれないが、化政期の増加の決定的な理由とはならない。

天明期の「けり」を用いた秀作に、闌更の「枯蘆の日に日に折れて流れけり」、白雄の「春の雪しきりに降りて止みにけり」がある。蕪村では「月天心」以外に、辞世の「白梅に明くる夜ばかりとなりけり」がある。

さらに化政期の宗匠同士も相互に影響を与えあっていた。この期の「けり」を使用した秀作として、例えば一茶の「一本の鷓頭（けいと）ぶつり折れにけり」の一物を確かに捉える観察眼、家庭に苦勞して流浪した一茶の境涯を感じさせる「水鳥のどちらも行かず暮れにけり」、代表句の一つである「大根引大根で道を教へけ

り」を挙げておきたい。

イ 加えて、統計からみる化政期の特色として、天明期、天保期に比して、切字そのものの使用率が低い。「や」「かな」「けり」だけをとっても、天明期六八・五%、天保期の七四%に対し、五三%にとどまる（別表1）。

この理由のすべてを文化に求めるのは誤りである。だが作品は通奏低音のように、無意識的に文化的な影響を受ける。例えば、新興俳句の代表作に戦争を題材とする作が多い。

ここで化政文化の特徴を象徴的に捉えると、文学的には川柳、狂歌、また『浮世床』、『浮世風呂』、『東海道中膝栗毛』などの滑稽本の流行がある。これらの作品に共通するおかしみ・滑稽の精神は、一步引いたところから自らを客観視する態度によるものである（注一）。悪く言えば逃避ともいえるが、ともかく化政文化は多様性を生んだ文化である。

このように見るとき、「けり」の使用や、切字全体の減少という俳諧における多様性は、同時代の文化的な背景の影響を見逃すことができない。化政期を代表する俳人が、一茶であることも偶然ではない（注二）。

二 俳句における統計（別表1参照）

(一) では俳句ではどうか。切字の発句と脇句の切断という役割は失われたが、その影響はあるのか。論証の便宜のため、俳句における統計を三分類しておく。具体的には、

i) 平均値（化政天保期程度から天明の間程度） 虚子、石鼎、久女、草城、不器男、たかし

ii) 「けり」重視派。 普羅、万太郎、霹星、青畝、敦

iii) 使わない派（天明レベル以下） 蛇笏、秋櫻子、馨子、素十、風生、源義、汀女、多佳子、楸邨、三鬼、欣一、龍太、兜太、草田男、不死男、波郷、湘子、澄雄である。

(二) 以上の統計を前提として、まず俳句において「けり」が「や」「かな」と同様の有力な切字といつ頃認識されたかを検討する。

先に筆者の結論から述べると、新興俳句期に「俳句らしさ」とは何かを検証し始めた者らが、（自らは用いないものの）有力な切字としての「けり」を意識的に俳壇に広めたというものである。どういうことか。

ア 遠回りのようだが、統計を見直そう。統計から単純に仮説を立てれば、iiグループが活躍していた時代に「けり」が有力な切字であるという認識が広がったと見るのが素直である。このグループのうち、活躍時期が最も早いのは普羅・万太郎・犀星である。

イ 「ホトトギス」について

(ア)「ホトトギス」における切字観

まず普羅から検証する。普羅は大正期の「ホトトギス」を代表する俳人である。「ホトトギス」は、旧派宗匠や秋声会系、新傾向俳句等の存在にもかかわらず、今日的に振り返れば、明治・大正・昭和初期の俳壇において最重要の位置を占めてきた結社といえる。

そこで、「ホトトギス」の切字観を確認する。子規は『俳諧大要』にて「切字など一切なき者と心得て可なり」と述べる。また虚子は『俳句とはどんなものか』にて「や、かなは俳句を形式づけるところの文字であります」と、切字を「や、かな」とそれ以外に大別する。草田男も戦後すぐの『俳句入門』にて「や、かな」重視の切字観を著している。

つまり、「ホトトギス」の多くの俳人の認識上、「けり」は「や」「かな」以外のその他多くの切字と同列のものに過ぎない。

(イ) 統計

実際、普羅と同時代の蛇笏はiiグループに属する。また同時代の石鼎をはじめ、「ホトトギス」を代表する多くの俳人がiグループに属する。「ホトトギス」の俳人の意識として「けり」は「や」「かな」ほど重要な切字ではない。ただ、旧派宗匠の時代から俳句を作り続けてきた子規・虚子及びその門下にとって(iグループ)、「けり」の使用率が化政・天保期程度であることはおかしくない。

裏を返せば、「けり」の使用率が「ホトトギス」において高くなつた訳ではない。これらのことを考えると「けり」の多用は、普羅という俳人の特徴に帰するところが大きい。

(ウ) 秀作

それでは、「ホトトギス」派が「けり」の使用の拡大に影響を与えなかったかというところではない。彼らに認識はなくとも、「ホトトギス」の俳人に「けり」を用いた秀作があったことが、同時代・後世の俳人の「けり」の使用を無意識的に支えた

はずである。

例えば、子規「幾度も雪の深さを尋ねけり」虚子「桐一葉日当りながら落ちにけり」「簾木に影といふものありにけり」鬼城「冬蜂の死にどころなく歩きけり」蛇笏「くろがねの秋の風鈴鳴りにけり」石鼎「蔓踏んで一山の露動きけり」普羅「駒ヶ岳凍てて巖を落しけり」など各人の代表句といふべき句に「けり」が用いられている。

ウ 非ホトトギス派

(ア) 文人俳句

A 次に犀星・万太郎である。彼らは専門俳人とはいいがたい。だが、草城の「ミヤコホテル」をめぐって論争を繰り広げるなど、俳壇への影響力が少なからずあった(注三)。

彼らの「けり」の使用率は高い。実作上も、万太郎には「秋草をこつたにつかね供へけり」「神田川祭の中を流れけり」、犀星には「青梅の譬うつくしくそろひけり」などの秀作がある。それでは彼らが「けり」を好んだのはなぜか。文末に使われることが多い切字という点で「かな」と、過去の助動詞という意味で「き」と対比することがわかりやすい。その上で「けり」の本意に迫っていく。

B まず大別すると、「かな」は通例俳句では体言に接続する終助詞であり、体言止めの一形態と分類できる。「かな」は複雑な意味がある上古の「かも」と違い(注四)、詠嘆の意味が強い。ゆえに健吉の言葉を借りれば、大断定・治定として一句全体を載せて安定する力、更には一句全体を響返す力を持つ。

また連歌からの歴史を見ると、連歌においては脇からの明白な切断という観点、また俳句になっても、叙景を好む特質から体言への接続の容易な「かな」が好まれてきた。

さらに「かな」は和歌における用法を挙げるまでもなく、動詞の連体形にも接続可能である上、俳句では俗に「吹流し」と呼ばれる軽いニュアンスでの使用も可能である。

C 次に「き」は話している時点から見て、その出来事が現在から切り離された過去の事実であることを表す。よって行為的・直写的であり、端的に自己の経験的過去を語る意味が基本である。過去回想的な本意はない。例えば、「帰りける人來れり」といしかばほとほと死にき君かと思ひて」(万葉集二七七二)「ほととぎす思は

ずありき木のくれのかくなるまでに何か来鳴かむ」(万葉集一四八七)という用例が挙げられる。

D 以上を前提に比較する。まず「かな」に対し、大別すれば「けり」は用言に接続する助動詞であり、用言止めの一形態と分類でききる。次に「き」との比較でいえば「けり」は、現在よりも前から存在している出来事が目の前にあるという意味を表している。

和歌の歴史を見れば「けり」の意味は複雑だが、ある事柄が過去に実現していたことを新たに認識して心に刻むことを本意とする。この本意が時代の下るにつれて、ある事柄が過去から現在まで引き続いて実現していることに対する詠嘆の意味が生じたとされる。

だが管見の限り、「けり」が詠嘆に転じた理由を論じるものはない。この点につき「けり」の語源については「来・あり」又は「き(助動詞)・あり」の両説があるが、いずれも存在態の「あり」を含む。特に「来・あり」説を採れば、「くしてきている」という動作ないし結果の存続の意味が濃厚である。

かかる語源を持つ「けり」は、想起または再認識の事実を、少なくとも仮定を主要契機として、和歌などにおいて①例えば後朝、花、旧都の栄華などの何らかの華やかで豊かな過去の体験があり、現在は失ったことを回想する場合、又は②素晴らしい情景が「ずっと」あったのに、それに今まで気が付かなかったが、今気が付いたと用いることが多い。

重要なことは、①②のいずれにしても作者の主観において過去と現在とがつながっていることである。人は過去を回想するときに、過去の事実をそのまま思い出すのではない。その過程において、過去を理想化する。そのような回想による美化の究極的な形として、特に和歌等の詩歌において、「けり」に詠嘆の意が派生していったとみるべきであろう。

こうしてみると、「けり」における詠嘆は「かな」の純粹な詠嘆に比すればやや亜流である。しかし統計のとおり(別表3)、特に古今・新古今の時代に至って、感情の発露の表現を本質とする和歌においては、「けり」の使用率が高い。これらは状況を認識した作者の心の動きを示すという「けり」の特徴を生かした詠み方が浸透したものとみることができる。

E 万太郎・犀星は、専門俳人ではないこともあって、俳句は詩であり、発見を示

し作者の心の動きを明示するということに躊躇がなかったため、「けり」を多用したのではないか。体言を重視して叙景を中心に作者の感動を伝えるよりも、気が付いて驚いたという怪妙で流動的な作者の感動を伝えるのが適当な場合があると判断したのであろう。そのようなときに「けり」は適切な切字であったはずだ。換言すれば、何にどれくらい感動したかという観点から「けり」を使うのか「かな」を使うのか適切な切字を使い分けようとしたものとみることが出来る。但し文献をあたつても、万太郎・犀星がそのことに意識的であったかどうかは明確ではない。

(イ) 新興俳句

A では、「けり」を有力な切字と認識し始めたのはいつ頃か。それには新興俳句運動を概括する必要がある。新興俳句隆盛期の各俳誌に直接当たると、熱気の籠った論説の交換や実作が目飛び込んでくる。新興俳句は、俳句とは何かを本気で問い直す運動だった。

これを新興俳句側から見れば、俳句から俳句臭さをふるい落とし、詩として独立させるのだという意気込みであつたろう。それを「俳句臭さ」と捉えるか、「俳句らしさ」つまり俳句の本質と捉えるかは立場の違いだろうが、この期に季・定型の問題に加え、切字についても激しく議論されている。彼らの議論を読むと、それほど感動もしていないのに、切字を使ってさも感動したかのように俳句を詠むことは、誤りと考えるようである。

B 新興俳句の運動者らはこのような問題意識から切字の多様性の研究・調査に取り組んでいる。例えば第一に統計上、秋誓両氏の切字「けり」の使用率の低さは顕著である(別表1)。「二百句」という限定があるが、誓子が「けり」を全く使用していないことは特に目を引く。

この点につき、誓子は「けり」に代わり「たり」を多用する。健吉は昭和七年の『凍港』を代表する「樺太の天ぞ垂れたり練群来」の解説にて、「(たり)は」『けり』よりも強く、語感が硬く、調べが重厚になり、より即物的・現代的で、感動の重さをしっかり支えることができる」と評する(『現代俳句』)。

敷衍すると、完了・存続の助動詞である「たり」は、詠嘆よりも状態の呈示に向いた助動詞である。誓子はその特質を、自らの写生構成・即物具象という句柄に生かしている。そして誓子が敢えて「けり」を忌避しようとするのは、「けり」が代表的な切字として意識していたことのあらわれである。

第二に、本稿でも統計上参照した楸邨の「新興俳句の将来と表現」は『俳句研究』昭和十年四月号が初出である。楸邨は芭蕉・鬼城・虚子・万太郎・誓子・秋櫻子の句集、「馬酔木」「天の川」「青嶺」「土上」「ホトトギス」「雲母」「草上」「倦鳥」における体言止め、用言止め、「や」「かな」「けり」の使用率を調査している。遅くともこの時期の楸邨が、「や」「かな」「けり」を代表的な切字であるとみていたことがわかる。

第三に、波郷は昭和十七年から十八年にかけて「鶴」や「俳句研究」において、韻文精神を説き、昭和十八年発表の句集『風切』では「霜柱俳句は切字響きけり」と作った。また波郷は「実作の格としても、や、かな、けりの切字を用ひよ。」（昭和十七年十一月「鶴」といっている。これは、波郷が「や」「かな」そして「けり」を代表的な切字として意識していたことの証左である。

更にいえば、波郷が韻文精神を説いたのは自らも「馬酔木」において参画していた新興俳句運動の散文化傾向への反発からである。よって、波郷の発言や「霜柱」の句によって、「けり」が有力な切字であると認識されたという説は因果が逆であって採り得ない。既に新興俳句において切字「けり」は意識されており、波郷は同運動が排除した「けり」を含む切字の復興を説いたのである（注五）。

以上のとおり、新興俳句運動が「けり」を代表的な切字として認識させたのである。そして皮肉なことに、この認識の拡がり「けり」を含む切字の使用の減少をもたらした。

③ 続けて統計を見ると、戦後から現在までⅢグループに属する俳人が多い。では波郷が韻文精神を説く中で、「けり」の使用も薦めたにもかかわらず、結局実作において「けり」の使用率が増えないのはなぜなのか。この疑問は、「けり」が重要な切字として認識され、使用されていくに至る経緯の確認という本稿の目的と多少ずれるが、確認したい。

ア 端的に理由を挙げれば、切字観の多様化であろう。結局、波郷がいかに韻文精神を説き、健吉が深い見識に裏打ちされた切字に関する論考を書こうとも、新興俳句運動の成果をなかつたことにはできなかった。確かに同運動を経ても、戦後の有季定型派は季語と定型を維持した。だが「有季定型派」であっても「有季定型切字派」ではないのである。切字については、特に切字がなくとも秀作をつくることのできるという認識が広まった。俳句とは「切字」を用いるものであるという束縛は

なくなり、切字を用いるかは各人の切字観により委ねられることになったのである。もちろんすべての俳人の統計を取ることは不可能だが、大きな流れだけを述べても、戦後誓子は「天狼」、草田男・楸邨は「萬緑」・「寒雷」において彼らを慕う有力な俳人とともに実作を重ねている。統計上も、多佳子・三鬼・楸邨・草田男・澄雄など、多くの俳人は切字をそれほど重視していない。また社会性俳句の端緒となった欣一、前衛俳句を代表する兜太も切字をほとんど用いない（別表1参照）。

また「ホトトギス」に所属する者でも、汀女・風生などは、切字を用いなくなり、年を追うにつれて切字をあまり用いなくなっている。統計には年代別の使用率は表れていないが、虚子も句日記形式により、年を追うにつれて切字をあまり用いなくなっている。

決定的なことに、韻文精神を説いた当の波郷や波郷に兄事した湘子も、長きにわたる句作を確認していくと、iグループほど「けり」を用いていない。他方で、万太郎の影響を受けている敦は切字を重視している。

イ また、切字自体の多用化も理由の一つである。本稿では「たり」をもって代表させたが、実際には「ず」「ぬ」「つ」「り」「なり」「あり」「をり」「なし」など多様な切字が使われている。また連体形にて「たる」「なる」などの派生形も使われている。

ウ 以上のような、切字観の多用化、切字自体の多用化は「けり」の使用率の減少の理由の一つと結論づけることができる。

第三 結語

新しさはすべての分野における永遠の主題である。試行錯誤されているが、もの特性を見極めるところから新しさが生れてくるのではないか。本稿で縷々確認してきたのも、切字「けり」の使用の増減及び意識の確認を例として、切字というものの本質の一端を明らかにしたいと考えたからである。

改めて戦後の俳人の多くがiiiグループに属することが通例となっている現状に鑑みれば、切字を使わないことは実作者の間に浸透したといつてよいだろう。だがここまで普遍化したことにより、逆説的に切字の使用は新たな趣を生むかもしれない。

その際もちろん、様々な切字を用いて俳句を作り、俳壇の評価による淘汰を待つて新しい印象を有する切字を探し出すという帰納的な方法もある。しかし、各切字の歴史や本意を探ったのちに実作を試みるという演繹的な方法があつてもよいの

ではないか。

本稿では「けり」についての概観しかしていない。だが、切字をめぐるのは、それぞれの切字が助詞や助動詞として本意や、和歌以来の詩歌や古典文学における作例・用例に従った歴史を背負う。最終的に切字の持つ本意・歴史にとられては本末転倒だが、まずは切字の本意・歴史を知り、その上で実作における新しい印象を探していくのが本道であり、また近道でもあろう。

本稿では、「けり」を主に「や」「かな」「たり」の使用率を調査したにとどまり、他の切字を含む調査については考察の余地が残されている。また和歌、特に新古今和歌集における疏句の歌と連歌との連関についての統計的な研究は管見の限り見当たらない。これらのことは本稿において残された課題として、さらに考察を深めていきたい。

参考文献…本文・脚注に掲げたもののほか、

『「ちゅうくらい」という生き方』渡邊弘 信濃毎日新聞社二〇一五。

『俳諧の詩学』河本皓嗣 岩波書店二〇一九。

『切字と切れ』高山れおな 邑書林二〇一九。

『「いき」の構造他二篇』九鬼周造 岩波文庫一九七九。

『俳句とは何か』山本健吉 角川ソフィア文庫二〇〇〇。

『俳句の世界』小西甚一 講談社学術文庫一九九五。

『日本文法大辞典』松村明 明治書院一九七一。

『日本国語大辞典(第二版)』小学館二〇〇一。

(注一) 周造は、「可笑しい」について、現に与えられたものが、その目的理念と矛盾していることを把握するのは高等な知性の働きであるとする。厳かなるものとおかしなものは交代性があり、そこに人生の悲喜劇をみる。ブレヒトの「異化」論も同様の視点であろう。古来、支考「おかしきは俳諧の名」(『續五論』)、子規「滑稽もまた文学に属する」(『俳諧大要』)、健吉「俳句は滑稽なり」(『挨拶と滑稽』)などと言われる所以である。

(注二) むしろ以上は増加の一因だが、すべての理由ではない。

(注三) 但し、論争の経緯を見ても、影響力を比較すれば圧倒的に万太郎の方が大

きい。

(注四)「かも」は和歌において、上古でのみ使用される。「かも、らしなどの古詞などは常に詠むまじ」(『新撰髓脳』藤原公任)

(注五)なお、健吉は昭和二七年に『かな』についての月並的考察、「や」についての考察」を發表したが、管見の限り「けり」についての考察を残していない。これは「けり」が切字として認識されていなかったということではなく、健吉が芭蕉を重要な指標としており、芭蕉における「けり」の使用率が低いことで説明できる。

注：二首句に収ったのはヤマトリノ歌として適當であるが、加賀世孫の天孫降臨が二首句として居るので、これに平仄を含めた。
 原注対象とする俳人は『現代俳句』（俳諧）を一人の茶集とした。だが俳世所全集の原注の補訂に因襲を承したため、取捨選択せざるをえなかった。

俳人名	高浜虚子	飯田琴芳	原正徳	前田香雪	久保田万太郎
底本	定本全句集	全句集	全句集(中巻)	幼年文集	全句集(全巻)
200句	10部の節立てに従い、冒頭より70句	全9句集冒頭より各句22句 山蓮集と梅花集のみ23句	句作開始年(六正元年~昭和17年、六正15年=昭和5年) 55年 (昭和24年~26年) 迄の32年 年につき、六正元年、2年は7句、それ以外は各6句	句作開始年(六正元年~昭和17年、六正15年=昭和5年) 55年 (昭和24年~26年) 迄の32年 年につき、六正元年、2年は7句、それ以外は各6句	夏の大、流業抄冒頭から67句成集 抄以後66句
や	34	26	71	58	59
かな	32	36	26	33	49
けり	4	0	2	4	0
たり	7	0	0	2	4
俳人名	室生犀堂	杉田久玄	日野眞哉	水鏡伏魔子	山口宗子
底本	室生犀堂句集	全集1巻(立風書房)	全句集	全句集(宗引)	全句集(興英社)
200句	冒頭から200句	杉田久玄句集(昭和26年版) 湧野、花玄冒頭より67句、尚り25句 か玄冒頭より66句	全集により全八句集とみて冒頭より 冒頭から200句	冒頭から200句	12句(夏田流業集から原文まで)7句、抄以後66句
や	46	38	48	40	18
かな	34	25	25	15	5
けり	4	3	3	3	1
たり	1	0	0	0	2
俳人名	阿波野蒼敏	高野無十	富安風生	芝不器男	松本たかし
底本	全句集	空	愛は一如	蛸牛文庫	蛸牛文庫
200句	全十一句集冒頭より18句 万尚と平田の み19句	冒頭から200句	冒頭から200句	冒頭から200句	冒頭から200句
や	30	22	20	81	32
かな	23	25	37	58	44
けり	0	7	0	3	5
たり	0	0	0	3	2
俳人名	角川義典	中村汀女	津島多伴子	中村草白助	石田英樹
底本	全集4巻(角川)	全句集(毎日新聞)	全句集	定本全句集	定本全句集
200句	5句集冒頭から40句	冒頭から200句	全五句集の冒頭から40句	【長子】【次の子】は34句、【真孫】から【白娘行】まで33句 【孫】から【白娘行】まで33句	【鶴の雛】から【雨宿】29句、 【権助】から【沙羅の花】28句
や	43	25	10	27	48
かな	6	15	4	3	10
けり	2	4	2	3	11
たり	1	2	2	3	4
俳人名	松原仙村	扶元不死男	西賀三胤	冥任敷	冥任敷一
底本	松原仙村句集	扶元不死男集	全句集	柿の辻坂(より)	俳句文庫(冥任敷一)
200句	全十二句集のうち東鑑から山脈まで冒頭から17句、まばらに鹿から望岳まで16句	冒頭から200句	全五句集の冒頭から40句	冒頭から200句×西嶋おさ子編で 【まつしき】【真孫】【白馬抄】始む	全八句集自序の冒頭から25句
や	20	38	3	42	27
かな	11	3	0	22	6
けり	7	5	0	0	10
たり	1	1	1	1	10
俳人名	宮澤謙	飯田健六	飯田祐子	金子宛次	鷹羽狩伴
底本	季節別全句集	全句集(各種別)	俳句文庫	金子宛次集	俳句集(成)
200句	春夏秋冬冒頭より50句	春夏秋冬冒頭より50句	冒頭より200句	少室から流業集まで16句、流次抄録から流業抄まで15句	嵐空から俳日記まで各10句
や	34	6	28	4	26
かな	13	10	10	3	7
けり	5	0	11	1	4
たり	1	0	0	0	0
俳人名	天明	化政	天保		
底本	中興俳諧集	化政天保俳諧集	化政天保俳諧集		
200句	三浦清只(清只巻句集) 六島賢六(賢六句集) 高井几重(几重巻) 加倉白雄(しろ雄巻) より33句、加藤鉄堂(鉄堂句集) 高松野庭(牛化巻句集) より34句	夏目秋英(秋英巻) 建部興哉(曾我句集) 持江道彦(道彦巻) 井上二雄(二雄巻句集) 星理二(星二巻句集) より各40句	田川雲崎(雲崎句集) 飯田春乳(春乳巻句集) 冒頭より冬67句、櫻井梅室(梅室巻) 冒頭より各40句		
や	76	52	75		
かな	50	35	56		
けり	5	1	2		
たり	5	1	3		

撰者・著者等	対象本	調査者・句数	や %	かな %	けり %	たり %
連歌						
二条良基・救済共撰	『菟玖波集』	田中 119	75.9%	61.51.3%	10.8.4%	
宗祇	竹林抄	田中 285	42.14.7%	140.49.1%	5.1.8%	
宗祇	新撰菟玖波集	川本 251	39.16%	139.55%	1.0.3%	
猪苗代兼載	園塵	田中・川本 413	99.24%	204.49.4%	1.0.2%	
宗祇	宗祇発句集	田中・川本 906	203.22.4%	342.37.7%	4.0.4%	
連句						
山崎宗鑑	新撰犬菟玖波集	川本 93	18.19%	36.39%	3.3%	
貞門	犬子集	田中 949	375.39.5%	322.33.9%	4.0.4%	
貞門	玉海集	田中 939	496.52.8%	249.26.5%	6.0.6%	
西山宗因(談林)	西山宗因全集	川本 743	312.42%	107.14%	11.1%	11.1%
芭蕉発句集	松尾芭蕉	田中 988	384.38.9%	195.19.7%	29.2.9%	10.1%
蕪村発句集	与謝蕪村	川本 1463	542.37%	445.30%	42.3%	29.2%
新訂 一茶句集	小林一茶	川本 2000	779.39%	553.28%	169.8%	10.1%
俳句						
正岡子規	獺祭書屋俳句帖抄上	川本 745	228.31%	227.30%	82.11%	16.2%
村上鬼城	鬼城句集	楸邨 200	84.42%	53.26.5%	19.9.5%	

田中道雄「“古池やー”型発句の完成—芭蕉の切字用法の一として—」『文学論集』第十号佐賀大学文理学部1969

『俳諧の詩学』「新切字論」2019岩波書店

『俳句研究』昭和10年4月号、『加藤楸邨初期評論集成第一巻』

対象本	調査者・句数	かな %	けり %	ける・けれ	かも	たり
万葉集（巻1～5）	伊藤 906	0 0%	31 3%	16 1.7%	110 12.1%	4 0.4%
古今和歌集	伊藤 1100	60 5%	89 8%	111 10%	未調査	未調査
新古今和歌集（巻1～10）	伊藤 989	124 12.5%	97 9.8%	34 3.4%	0 0%	0 0%

備考:句末に限る